主　論　文　要　旨

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	魏　郁欣

主 論 文 題 名：

明清時代における福建の宗族と風水―墳樹にかかわる諸問題を手掛かりにして―

（内容の要旨）

本研究は明清時代の福建に発達した宗族、すなわち血縁を結合原理とした父系同族組織に焦点を当て、なかでも墳墓の周囲に生える樹木（以下、「墳樹」と呼ぶ）に関わる諸問題を手掛かりとして、その地域に身を置いた個々の民衆が宗族を永続的に維持するために、どのように風水信仰に関わっていたのかを考察するものである。

日本の東洋史学界は戦前以来一貫して、宗族を含め村落、ギルド（guild）、宗教結社など、伝統中国に存続した自治的な社会団体の意義を検討してきた。それは、国家と基層社会の民衆との間に介在する社会団体の役割が伝統中国の国家と社会の関係構造を明らかにするための鍵であったためである。すなわち、社会団体についての考察を通し、国家が社会団体を媒介として個人に対する支配をどのように貫徹させていたかという〈上＝王朝国家〉からのあり方とともに、社会団体を意図的に形成した個人の目的とは何か、あるいはこうした選択を迫られる個人を実際に取り囲む社会状況とはいかなるものであったかという〈下＝在地社会〉からのあり方を解明することが可能になる。本研究は中国の典型的な社会団体である宗族に着目する。

諸団体のなかでもとりわけ宗族に注目する理由について述べる。まず、伝統中国の人々にとって最も重要な社会団体は宗族であることが第一の理由である。家族およびその延長線上にある宗族を含む、血縁の概念に基づいて個人を中心とする人間関係が同心円状に広がっていく状態は伝統中国において普遍的に存在してきた。この意味において宗族は人間関係を構築する原点であり、伝統中国の諸社会団体を総合的に考えるうえで極めて重要なテーマである。また、第二の理由として、多くの宗族は一族の記録を残す慣行を維持してきたがゆえに、族譜をはじめとして蓄積された史料は他の社会団体のものよりもはるかに充実していることが挙げられる。

宗族そのものは文献をたどると、すでに紀元前 2~3 世紀から記録が残されているが、宋代に入ると新しい形態を持つようになり、さらに明清時代以降、その形態がほぼ完成すると認識されている。すなわち明清時代には、宗族の形成・展開を加速する社会経済的要因が潜んでいると考えられる。ひとつの仮説として、明清時代における宗族の形成・展開は明代中期以降に社会経済の分野において頻繁に生じていた諸変動と密接な関係に

あることが挙げられる。すなわち、東アジア国際商業の活発化を背景とする商品生産の発展、人口戸数の増加、郷紳勢力の拡大などの大きな社会変動とともに、閉鎖的な伝統農村社会は徐々に解体・変化していった。流動的な社会状況に対する不安感を抱く個人は安定化対策のひとつとして、血縁をたどって利害関係を共にする他者と相互扶助のための団体（＝宗族）を積極的に結成する動きがあった。このような捉え方は「戦略としての宗族形成」論 とも呼ばれている。

福建はまさに「戦略としての宗族形成」論を検証する最適な地域であると思われる。第一の理由として、福建は「水平的な流動」、すなわち地理的空間において個人が移動する現象と、科挙合格によって社会的地位が変化するという「垂直的な流動」がともに激しい地域であった。第二の理由として、宗族組織を形成する動きがほかの地域よりも顕著であることが挙げられる。したがって本研究は明清時代の福建に着目し、そこにも「戦略としての宗族形成」論があったか否か、また、その形成・維持過程がどのように進められてきたかを検証することを主目的とするものである。

福建の宗族についてはこれまで厦門大学を中心に研究が盛んに進められてきた。その研究成果によれば、明清時代の福建という地域に特有の宗族発展状況として、風水慣行に積極的に関与する行動が挙げられる。ただ、厦門大学を中心とする中国の福建宗族研究は宗族組織の形成・維持という局面における風水の役割について触れているが、それを掘り下げて研究する動きはほとんどなかった。さらに、日本の宗族研究に目を向けると、そこにも福建の人々が風水信仰に積極的に関与しそれによって宗族の形成・維持をはかろうとする場面について専門的に取り扱うものがほとんどない。それは、各地域の事例に基づき「戦略としての宗族形成」論を実証しようとすることに特徴がある日本の宗族研究、とりわけ 1980 年以降の研究にとって、風水実践は迷信というイメージを貼られることが多く、そこから何らかの戦略に基づく合理的な主体を見出すことが困難と判断されたためではないかと思われる。

しかしながら、このような場面に注目することには意義があると筆者は考える。その理由としてはまず、福建における宗族と風水との関わりを「戦略としての宗族形成」論を検証する射程の中に入れることによって、それに対する従来の固定観念の枠を越えられるのではないかと思われる。また、福建の宗族に特有の発展状況を抜きにしては福建という地域にあって人々がどのように宗族を形成・維持していたのかについて語れない側面があるのではないかとも思われる。そこで、本研究は日本の宗族研究においてこれまで取り上げられることがほとんどなかった風水慣行にあえて注目し、福建の人々が「非合理的」に見える行動を通して宗族を形成・維持していた過程から合理的な主体を見出すことを目指す。また、このような行動様式を生み出した福建という地域の特色についても考える。

実際、福建・広東をはじめとする華南宗族と墓地風水が密接な関係にあることは文化人類学においても明らかになっている。文化人類学的アプローチに基づき、風水それ自体の解明を中心とする先行研究（以下、「風水研究」と呼ぶ）には華南宗族と風水との関わりについて言及したものが数多くあるが、観念的に語られてきた風水の効能効果を信じて直接風水に関わろうとする個人の姿を前提にして論を展開させていく傾向があった。したがって文化人類学的アプローチによる風水研究を通して見てきた個人の姿は、主観的な意思を持つことなく「何も考えずに、ただこれまでの習慣にしたがう」というようなものであった。

前述したように、歴史学的なアプローチによって行われてきた日本の宗族研究は1980年代以降、「戦略としての宗族形成」論を実証するようになり、そこには個人の能動的な側面を重視する傾向が見られるが、もし試みに歴史学が宗族研究で示した個人の能動性を重んじる手法を用いて福建の人々による「盲信的・盲従的行動」について考察するとすれば、これまでの文化人類学の研究成果とは異なる個人の姿が現れるかもしれない。そこで明清時代の福建という地域にあって人々が宗族の形成・維持においてどのように風水に関わっていたのかを改めて考察するためには、墳樹に着目することが有効であると筆者は考える。

墳樹とは文字通り墳塋に植えられた樹木を意味する。とりわけ墳樹を植えて墓地風水を整える行為は儒教思想の観点からすれば、死者に対する「死後の孝行」として評価されることになる。すなわち、墳樹を通してみてきた風水は、①風水自体、および②風水に対する外部評価・共通認識、のふたつの面を含む。ならば、福建の人々が宗族の形成・維持において示した風水への強い関心は、必ずしも風水自体に対する信念（あるいは盲信）に基づいて直接に風水を実践しようとする面とは限らず、風水を信じているか否かはともかくとして、風水にまつわる社会の共通認識を用いて間接的に風水に関与しようとするもうひとつの面も存在するのではないかと思われる。

そこで明清時代における福建の宗族と風水との関わりについて全6章にわたって考察した結果、以下のようなことが明らかになった。

まず、第1章と第2章では「墳樹＝風水樹」という認識の理念的な面、すなわち墳樹を維持して墓地風水を整えることにはどのような理念が付与されたのか、また、このような理念を固めるためにはどのような法規範が定められたのかを検討した。

第1章「墳樹認識の系譜」では、明清時代の福建に定着していた「墳樹＝風水樹」という認識の系譜をたどった。すなわち墳樹はそもそも風水とはほとんど無関係であった。「墳樹＝風水樹」という認識は墳樹慣行が成立した約500年後に形成されたものである。ただ、このような認識はしばらくの間、傍流的なものと見なされていた。それが儒教知

識人から支持され、主流の座を得るようになったのは早くても宋以降の時代であると考えられる。さらに福建出身の朱熹が書院教育などを通して新儒教の伝播・発展に取り組んだ結果、「墳樹＝風水樹」という認識と孝の実践とを結び付ける新儒教知識人の墳樹認識は福建の人々に共有されるようになった。

第 2 章「墳樹をめぐる法規範の構築――『大清律例』盗園陵樹木附律条例を中心として――」では、『大清律例』盗園陵樹木律に付された幾多の条例の制定過程を時系列で追った。儒学を正統とする立場から新儒教知識人の持論を公式認識として受け入れた明清両王朝は、子孫が先祖伝来の墳樹を維持することを道徳規範のひとつと見なしていたが、それを法規範に取り込むことはほとんどなかった。しかし、18 世紀以降、清朝は従来の方針を改め、墳樹をめぐる法規範を積極的に構築していった。その目的は、宗族内部の人間による盗伐が頻発していた社会状況のなかで、それをめぐる族内紛争を法的に解決することによって社会秩序の安定化をはかることにあった。

また、第 3 章・第 4 章・第 5 章では墳樹に関する具体的な事例を取り上げ、宗族組織を維持・強化する際に、福建の人々が墓地風水に積極的に関与した現象の背後にある「実態」の解明を試みた。

第 3 章「明代福建の宗族と墳林――万木林説話をめぐって――」では、建寧府建安県に位置する万木林が明代前期に物語言説のなかで風水効果のある墳林として意図的に描かれるようになる過程をたどった。本来万木林は特別な意義を付与された墳林というよりも、むしろ慈善事業の遂行を目的に設置された一般樹林であったが、明代以降、万木林の創設者楊達卿の孫である楊栄は万木林をめぐる説話を数多く作成し、一般樹林から墳林へと人為的に転換させようとした。その目的は、科挙合格に由来する自身の優位性を確立し、時間の経過とともに離反しがちな諸分派を統合することにあった。

第 4 章「清代の墳樹紛争に見る福建宗族の資源獲得戦略――清流安豊羅氏を例として――」では乾隆年間、汀州府清流県に定住する羅氏と近隣の宗族との間に続いた幾多の紛争に注目した。羅氏は 12 代先祖の埋葬された墳山にある一部の樹木と墓地風水との関連性を強調し、墓地風水の損傷による先祖の不安を名目に、他姓による樹木盗伐行為の不当性を訴えた。一見他姓の伐採から墳樹を守ろうとする羅氏の行動は実のところ、樹木の用益権の獲得が主目的だった。用益権を獲得した羅氏はこれらの樹木を伐採して換金し、それを族内祭祀活動の継続に必要な費用に充てて一族の結集力を高めようとした。

第 5 章「清代福建の宗族と墳樹――福州郭氏を具体例として――」では、清末福州府城内に在住する郭氏を取り上げた。郭氏は数多くの族人が科挙に合格したことによって地域の名族として自他ともに認める存在となった。隆盛を極める郭氏は墳樹の栽培に多大な関心を寄せ、一族が共同所有する墳塋において大規模な植樹活動を展開した。墓地

風水に関わる実践的な活動のなかでもとりわけ墳樹に執着した郭氏の行動は、単に墓地風水を整えるのみならず、墳樹の生長によって一族の繁栄を視覚的に具現し、地域有力者としての権威を地域住民に再認識させることを主な目的とした。

第 6 章「明清時代の福建における風水の詞訟化――『莆陽讞牘』に即して――」では、第 3 章・第 4 章・第 5 章で紹介した各事例に示された宗族のあり方が果たして明清時代の福建に通底するものなのかという問題意識を踏まえつつ、明清時代の福建に固有の現象としてしばしば指摘された「風水の詞訟化」、すなわち風水を名目にして頻繁に訴訟を起こす行為の普遍化に焦点を当て、建安竜津楊氏・清流安豊羅氏・福州郭氏がどのような社会状況に置かれていたのかを見た。具体的には、祁彪佳という 1 人の裁判官が、当該地域における風水をめぐる詞訟には風水目的だけではなく、それに加えて資源獲得、報復、恐喝強盗などという風水目的以外のものも大量にあったという認識を持っていたことを明らかにした。そして、このような社会状況のなかで生まれた各宗族の行動は特殊なものではなく、むしろ明清時代の福建の普遍的なあり方を示すものであったことを論じた。

以上の事例研究から、次のような結論に至った。すなわち、明清時代、とりわけ 16 世紀以降における華南社会の人口増と社会経済の流動化、それに伴う資源の獲得競争の激化という状況下において、福建の人々が宗族組織の形成・維持を求めて風水に積極的に関与するようになり、一見迷信に基づき、合理的な根拠を欠くようにみえる行動であっても、そこには何らかの戦略に基づく合理的な主体性があったことが明らかになった。この点において本研究の意義は、①日本の宗族研究における空白部分を埋めたこと、②福建宗族をめぐる中国の先行研究を深めたこと、③風水を深く信じる個人の観念的な一面にとりわけ偏っている風水研究の研究動向を修正することによって、観念的な面と現実的な面との両面を併せ持つ明清時代の福建宗族の風水慣行を総合的に解明したことにある。

なお、このような行動を理解する際にとりわけ注目すべき点は、各宗族が同様に墳樹の理念を口実としてそれぞれの「実態」を粉飾しようとしたことである。その背景には、墳樹をはじめ風水全般に関わる新儒教知識人の認識が福建の人々に広く共有され、当時の福建地域社会において強く働いていたことが前提として存在した。ただ、「風水全般」とはいえ、それは実際には墓地風水に限定されることが多い。それゆえ、福建の人々は墓地風水の優劣に応じて死者がどのような状態に置かれるのかに対して常に敏感に反応した。このような死者に対する畏敬の気持ちが福建の人々に共通して内在していたことが、風水にまつわる共通認識を特定の目的に利用・悪用する現象を可能にした大前提であると考えられる。

Keio University

Thesis Abstract

No.

Registration Number:	□ "KOU" □ "OTSU" No. *Office use only	Name:	Wei yuhsin

Title of Thesis:

Fujian Lineage Organizations and Feng-shui in the Ming-Qing Period: Taking Various Problems related to Graveside Trees as Clues

Summary of Thesis:

This study considers various issues surrounding commemorative trees planted around tombs (fen-shu 墳樹), as clues about how people's geomantic beliefs were used in the Fujian region during the Ming-Qing Period, to permanently maintain lineage organizations.

Active involvement in the burial site's geomancy (feng-shui 風水) is often cited as one of the circumstances peculiar to the development of lineage organizations in the Fujian region, although not much attention has been paid to this activity within research on lineage organizations in Japan. In addition, Chinese studies on Fujian lineage organizations, conducted mainly at Xiamen University, acknowledge the role of feng-shui in creating and maintaining lineage organizations. However, most of the research conducted has not delved deeply into the matter. Moreover, much of the research on feng-shui has been conducted with the goal of explaining feng-shui itself and focuses on the relationship between feng-shui and lineage organizations in Southeast China, including Fujian. However, these studies have tended to focus on the ideological aspects of people's geomantic beliefs and, for the most part, have not touched on the practical aspects of how people have used and abused these beliefs.

In contrast, this study focuses on the activities of the Yang 楊 lineage living in Jian-an 建安 county, the Lo 羅 lineage living in Qing-liu 清流 county, and the Guo 郭 lineage of Fuzhou 福州, where fen-shu are believed to protect the feng-shui of burial sites and have become objects of great interest. This focus has discovered that due to the post 16th century socioeconomic transformations caused by population increases in Southeast China, along with the accompanying resource grabs, feng-shui played an important role in the people of Fujian's efforts to create and maintain lineage organizations. The study reveals that the feng-shui system promoted an ideology that resulted in making people firmly believe in the effects created by feng-shui, in addition to its more practical use due to a widespread but more cynical awareness of feng-shui. This study is therefore important due to its comprehensive explanation of both the ideological and practical use of feng-shui in Fujian lineage organizations during the Ming-Qing Period as follows: 1) it fills a vacuum in Japanese research on lineage organizations; 2) it deepens findings from prior research in China on Fujian lineage organizations; 3) it corrects the trend in feng-shui research to focus solely on the ideology of individuals that deeply believe in feng-shui.